関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

近世、摂津池田に見る地域文化の一側面 ―山川正宣の 「夢庵老公三百周忌懐旧和歌」 の場合―

著者	鶴崎 裕雄
雑誌名	國文學
巻	73
ページ	198-211
発行年	1995-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/2416

近世、摂津池田に見る地域文化の一側面

――山川正宣の「夢庵老公三百周忌懐旧和歌」の場合――

鶴崎裕雄

地域文化を論ずる時、各々の地域の伝統や歴史への関心を無視することはできない。地域への関心は地域史や郷土文化の研究となったり、お国自慢や郷土の誇りとなって現れる。江戸時代には各地・各国でこうした地域史や郷土文化への関心が高まった。通俗地誌ではあるが「名所図会」に伝承や偉人伝の類が記され、古歌や歌枕が説かれているのも、地域文化への関心の現れである。

中世、室町時代の摂津国池田には国人領主池田氏が勢力を得て、経済的にも繁栄した。応仁の乱で荒廃した都から歌人や僧侶ら文化人たちが池田氏を頼って下向して滞在し、草庵を結んで永住する者もあった。夢庵老公こと牡丹花肖柏も池田に居住した文人である。江戸時代後期、池田の文人山川正宣たちが肖柏の三百周忌に和歌一巻を編み、肖柏に縁の深い大広寺に奉納した。次に紹介する「夢庵老公三百周忌懐旧和歌」がその奉納和歌一巻であり、近世の池田の文人たちによる地域文化への関心を示す好史料である。

現在、新たに「池田市史」の編纂が進められており、私も委員の一人として室町時代の執筆を担当する。池田の室町時代の史料には肖柏の歌集『春夢草』が有用であって、肖柏を抜きにしては室町時代の池田は語れない（ほかに肖柏の句集『春夢草』があるが、史料となる内容は少ない）。池田における肖柏の史料調査において巡り会ったのがこの奉納和歌一巻である。江戸時代は私の担当する時代ではないが、本稿では「夢庵老公三百周忌懐旧和歌」を翻刻し、この一巻の歌人たちを通して地域文化と文学史の関わりを考えてみたい。

一　「夢庵老公三百周忌懐旧和歌」

凡　例

一　池田市の大広寺所蔵の山川正宣自筆本を底本とする
一　底本は、紙本墨書一巻、縦二〇・五㎝、横四一〇・〇㎝
一　改行など、できるだけ原文の体裁に従った
一　ただし濁音を付し、異体字・旧漢字は現行漢字に改めた
一　各歌に整理番号を付した

夢庵老公三百周忌懐旧
各詠三首和歌並序

山川正宣

牡丹花の翁は、もとやんごとなき
家にしもうまれながら、はやう世の
ちりをいとひて、み山に遊び、心ざし
清らかに風流の道ふかうおもひ
入たる人に社有けらし。おいの
後、都方のさわがしきによりて、
この山の麓にうつり住、月花をのみ
ともとして過されつるほど、思ひかけず
大内にめされて、わか道のいさをゝしも
あらはされたりしゆゑよしは、
三条のおとゞの記させたまへるふみ、
またみづから書れし物にも詳なれば
さらにいはず。いでやこのおほん
時なむ四方の民草みことのりに
したがはず、それはた治むべきいくさの
君すらいきほひふるはれざりしかば、
世中に在とあるひと、みな物の
あはれをもしらず成にたるをりに
遭て、かばかり倭歌のみちをひろ
う学びたりしは、此おきなの外たゞ
ふたりみたりのみにして、いかでこの
人々のなかるましかば、つひにはうたの
みちも絶はつべかりしなりけり。
今やかしこき大御代にすめる人、
あふさきるさにたうとびしの

ばずやは有べき。後また和泉の
国さかひの津にかくれ、かしこにて
終をとられたれば、何がしのてらに
しるしの石も残れりとぞ。されば爰は
つひの棲にしもあらぬものゝ、今より
二十年あまりさきにはやうえらび
おきたる文をばいしに鐫て、其庵の
跡もたしかならねばとて、此み寺の
庭にひとゝ建たりき。其ころは
おのれまだいとけなかりしが、こたび
みもゝとせにあたれるからに、つたなき
ことのはを述て、いにしへを偲び、はた
里中の人等のよみ呉たる歌さへに
書集めて一巻となし、大広禅
寺にをさめて、其むかしをわすれ
ざるのしるしとす。かくてまた百
歳のゝち、幸にこのまきのゝこりたら
むには、其世の人もなほいまに
倣ひて、翁の徳をあほぎつゝ、
はた我等をさへにしのばざら
めやとて、しるしおきつるになむ。

卯　花

1月雪と見るだにかりの世中を
うの花ぞ咲ゐなの川つら

郭　公

2ふりいでゝ汝さへ昔をしのび音に
啼か佐伯のやま霍公鳥

夏　夢

3すぎ來しもまた行末もなつの夜の
見果ぬゆめにたぐへてぞしる

岸本明善

4物かはり星うつりてもしろたへは
むかしかたみと見ゆるうのはな
5石に名は残りてくちぬ五月やま
したへばこゝに杜宇なく
6えにしあらば短夜ながら明るまで
昔にかよふ夢やたのまむ

稲津令儀

7白妙に咲卯花のかき根をば

つきや残ると人の見るらむ

8 暁のまくらに近きほとゝぎす
おいのねざめを慰めてけり

9 ゆふかぜにあつさわすゝ手枕も
ゆめはのこりてあくる短夜

稲津修己

10 夕暮の風寒からぬやまざとも
垣根は雪と見ゆるうの花

11 まつひともあらぬみやまの時鳥
むかしこふとやふりいでゝ鳴

12 現にはかたらふ間なきみじか夜も
むかしを見する夢は有けり

脇坂一貫

13 見わたせば谷間にさける卯花は
しづえに波のよるもにほへり

14 さへき山ふもとに來啼鷂
はな橘にむかしゝのぶか

15 みじかよはぬるまもあらで暁の
鐘のひゞきに夢ぞ残れる

山川正彬

16 たれこゝにしら重ねせし山がつも
垣ほもたわにさける于花

17 我ごとやむかし恋しき蜀魂
はなたちばなに宿かりて啼

18 さらぬだにはかなきものを見ずもあらず
みもせでさむる夏のよの夢

井関三美

19 いにしへのことはの跡もしのばれて
垣ねをてらすうのはなの月

20 五月雨のはれ行空にたち花の
かぐはしくなく山ほとゝぎす

21 かゝりけむ昔の世ぞと夢の中に
しのぶもあやなゝつの短夜

大戸美元

22 暁闇のよそにしられぬ月かげを
まがきに見する庭のうの華

23 さとあまたゝれもきけとや鳴わたる
おのが皐月の山ほとゝぎす

24 名残あれやしらぬ昔のことながら
見はてぬゆめの覚るみじか夜

25いにしへを偲びこそすれ卯花の
　雪にもきみが名をば埋まず
26郭公なきこそ度れいにしへを
　忍ぶこゝろやそらに知けむ
27みもゝぢの昔をしのぶ手まくらに
　むすびもあへぬみじか夜の夢

四方信房

28しろたへにうのはな開り山陰は
　ふらぬに積るゆきと見るまで
29足曳の山ほとゝぎすふた声を
　なくやとまでは小夜更にけり
30おひ茂るなにはの蘆をかりの世は
　ふしの間もなき短夜のゆめ

上島庸清

31夏までもきえぬ雪かと見ればまた
　つきにもまがふ渓の卯花
32さへき山こゝに幾年ふりいでゝ
　むかしを名のる杜鵑かも
33なつの夜もながしとみつる夢の間に
　はやも驚くあかつきの鐘

中尾成美

34やまざとの墻根はゆきとまがひつゝ
　冬ごもりにもにはの卯花
35跡とへば苔も露けしいにしへを
　しのび音になけやま子雋
36臂まくら寝よとの鐘にゆめ覚ぬと
　おもへばあくるみじかよのそら

南野将房

37置露もいろにゝほへるうのはなを
　けふはさながら手向とやせむ
38古をおもひいでゝやほとゝぎす
　いまぞたむけと名のる一声
39短夜もまくらに近き柴の戸を
　たゝくゝひなに夢ぞ覚ける

桑門日行

40おともせで岸のいはねにしら波の
　よるかとぞ見るたにのうの花
41歳ごとにあはれとぞきく謝豹
　むかしもかくや啼わたり剣

緑阿

42世間を何にたとへへ(ママ)む夏のよの
ゆめも見はてぬしの、めのそら

通　阿

43我庵のかきの卯花さくころは
いつも月夜のこゝち社すれ
44聞たびにこゑめづらしきほとゝぎす
すぎし昔のことやとはまし
45見はつべきひまだもなつの短夜は
夢にぞひゞく暁のかね

英　運

46あかず見む月を宿して置露に
うのはながきもわかぬひかりを
47も、歳は三たび経ぬともいにしへを
さだかに名のれやま雋周
48現とはおもほえなくもなつの夜の
見果ぬゆめはなほぞはかなき

与志子

49やまざとの垣根にさけるうのはなは
そらにしられぬ雪かとぞみる
50むらさめにうの花笠もとりあへず
しとゞにぬれてなく鵜
51行みづに数書よりも夏の夜の
夢てふものぞはかなかりける

久万子

52ゆきと見えつきにまがひて白栲に
卯華さける峰の古寺
53佐伯やまふもとにかをる橘に
むかし、のぶかほとゝぎす啼
54ゆめにだも昔や見るとまどろめば
月影高く明るみじかよ

尼妙威

55見わたせばにはも雛もしろたへの
雪にまがひてさける卯花
56我宿のまつにおとせぬ子規
をちのやま辺を鳴てこそゆけ
57夏の夜にまたも帰らぬいにしへを
夢ばかりこそ慰めてけれ

おなじ時牡丹の名を
歌の上におきてよめる

右懐旧倭歌、各所詠
有遅速、故欲輯録而
不果、延至今也。素不愧
其措者以志所之尚
之謂耳観者察焉。十
年丁亥夏、正宣再識。

二　池田における牡丹花肖柏

室町時代の文人、歌人であり連歌作者である牡丹花肖柏について、ここでは改めて詳しく述べる必要はないが、肖柏の歌集『春夢草』と句集『春夢草』より、池田に関わる詞書を抜粋しておきたい。

肖柏は、嘉吉三年（一四四三）生、大納言中院通淳の庶子、内大臣通秀の弟。二十歳のころ伊勢から駿河への富士山一見の旅。応仁の乱中、三十歳を過ぎたころ池田に結庵、たびたび上洛して宗祇らと交わり、禁裏の連歌会にも参加。『水無瀬三吟』『湯山三吟』など宗祇・宗長との連歌のほか、『新撰菟玖波集』の編集、『九代抄』『六家抄』の秀歌の撰集を行った。永正十五年（一五一八）以後は泉州堺に居住。大永七年（一五二七）没、八十五歳であった。

以下、歌集『春夢草』・句集『春夢草』中、池田に関わる詞書を

五首

まさのぶ

布

58ふる寺にむかしを偲ぶ今日しもぞ
初音をもらせ山ほとゝぎす

加

59かしこきやいく世の空もことのはの
ひかりそひゆく雲のうへの月

美

60みもゝぢのけふにし逢てかのめでし
花もさかりの色を見せけり

久

61くちぬ名は世にのこれども為奈河の
ながれてはやき月日をぞおもふ

佐

62さへき山々陰にさくうの華も
いにしへしのぶよすがならまし

文政九年四月四日

抜粋する。

歌集『春夢草』（『新編国歌大観』第八巻、〈　〉の数字は歌頭の通し番号）

〈七八六〉藤原正盛池田遠江守亭にて

〈一七七一〉藤原正能池田伊賀守すすめし三十首に

〈一八〇四〉藤原正盛宅にて、十五夜に

〈一九四〇〉馬をかりて物へまかりしに、馬をかへすとて道泉池田佐渡入道もとへ申しつかはしける

〈一九六〇〉飛鳥井拾遺はりまに下向之時、摂州池田にての当座に

〈二〇一〇〉藤原長正池田弥太郎年の暮に送來侍りし

〈二〇一二〉八月十五夜雨ふり、十六日藤原正郷池田彦三郎過ぎし夜の会にもれぬることを申しておくり侍りし

〈二〇一五〉明石にまかりし時、藤原正盛かたより申送り侍りし

〈二〇一七〉かの浦に柿本のよりゐ給ひし松とてあり、その枝をうら人に一えだこひ来りしを、正盛かたへつかはすとて

〈二〇二三〉同藤原正能につかはす

〈二〇二五〉去年の今夜ともなひてあかしにてみしことを思ひて、藤原正数につかはす

〈二〇三八〉藤原長正かたへ霜おきたる篠につけて

〈二〇三九〉長正宇治のほとりに有りし比、今夜の月いかにながむらんとおもひやりて

〈二〇四〇〉長正ゆゑ有りて大和にまかるとて

〈二〇七八〉正月三日、霜ふりたりしに、梅につけて藤原正棟池田民部丞かたより申し送り侍りし

〈二一一〇〉正能が母身罷りし時、よみてつかはす

〈二一一二〉藤原正長母身まかりしに、名号の六首を詠みし和歌

〈二一二一〉玄左長正入道いときなくありしよりあひなはれ侍りき、和歌にこころざしふかく、廿歳よりうちに歌数もいとおほくよみて、ほどにも過ぎたる作と見え、上古の風にもかよふにやとおぼえき、十四歳にて歌合に、羇中関を、都いかにへだたりぬらんおとにのみ聞きこしものを白河の関、とよみて奇特なるやうに人人感じ侍りし、十八九の比にや、よみおき書きつらねて、愚老が瓦礫にあはせて五十番に愚判くはふべきよしのぞみしかば、彼あやにくにまかせ侍りし、前内府一覧ありて、おくに一首をくはへなどし給ひし、大かた万の道に心をすましてあはれふかきものなりき、思ひかけぬ事にあたりて世をはやくせしかば、愁涙たゆまもなく、思はぬ夜半もなかりき、ある夜夢に見え侍りて、これより後は夢にてもみえじと申すとおぼえて、夢中にもかなしびおもひなし、覚めて後よみ侍りし

〈二一三〇〉性繁正盛入道逝去時、寿量品を書写しておくに書きつけ

侍りし

〈二一三一〉道泉、数十年心へだてなく和歌の道に心ざしあさからざりしを、思ひがけぬ事にてなくなり侍りし、初七日に不動明王の文字を十首におきてよみ侍りし

〈二一四三〉玉翁昌琳池田若狭守九十歳うせ侍りし後、読経を聞きて

句集『春夢草』（『桂宮本叢書』第十九巻 二二〇頁）

藤原正種九十歳の春の会に

以上、肖柏の歌集・句集『春夢草』に見える池田に関わる詞書である。四季・恋・雑の部立別で、歌や句の成立年次は判らないが、池田氏の人々との交渉、池田氏の文化・文芸への関心度などが窺える。今後、『十輪院内府記』や『実隆公記』などの公家日記、また『細川両家記』や『細川大心院記』などの軍記物語と比較検討して、人物関係を整理しなければならない。

三　山川正宣をめぐる近世池田の地域文化

山川正宣[注8]は、寛政二年（一七九〇）池田の酒造家西大和屋金左衛門定正の嫡男として生まれ、家業を継ぎ、文久三年（一八六三）七十四歳の没年まで、和歌・俳諧を嗜み、『仏足石和歌集解』『山陵考略』などを著した。また文政五年（一八二二）以後十年間、実弟東大和屋正彬とともに池田村取締役を勤めた。正彬は、正宣より十三歳年下で、分家の東大和屋の養子、「夢庵老公三百周忌懐旧和歌」中、16・17・18の歌の作者である。

近世の池田は、柳沢吉保の所領となった時もあるが、主に幕府領であり、池田酒・池田炭などを生産する、いわゆる在郷町として栄えた。池田の酒造業[注9]は、安土桃山時代には始まっていたと推定され、満願寺村（川西市）から移住した満願寺屋が大坂冬の陣で徳川家康に酒を献じて朱印状を賜った後、繁栄したという。

十七世紀末から十八世紀初頭の元禄期が池田酒造業の全盛期で、その後、安永三年（一七七四）満願寺屋の大和屋からの借金返済拒否に端を発する朱印状官没収事件は、池田の酒造業が満願寺屋から大和屋ら新興業者の手に移るとともに、生産販売の主体が灘・西宮などの地域に交代した。むしろ池田の酒造業者は、金融業が主であって、高利貸しの兼業として酒造を営むとさえ指摘されるほどである。正宣時代の西・東の両大和屋は、酒造業兼金融業といった性格で、正宣の交友も金融を通じての交際を考慮せねばならない。

正宣には、文化十一年（一八一四）から天保十年（一八三九）まで二十六年間の歌集がある。自筆本は大阪府立中之島図書館に所蔵されており、大正十三年に池田史談会より池田叢書第三編『山川正

宣集』として翻刻出版された。歌はおおよそ年次順に配列されていて、詞書には歌の贈答や詠歌の背景が記され、正宣の交友範囲がよく伺われる。

以下『山川正宣集』中、『肖柏三百周忌懐旧和歌』の作者に関わる詞書を抜粋する。〈　〉の数字は池田叢書の『山川正宣集』のページである。

岸本明善

〈一〇九〉（文政九年）一地庵当座　十月廿四日　連衆　岸本明善、上島庸清、稲津修、脇坂一貫、中尾俶慎

〈一四七〉（文政十一年）岸本明善の家に伝へもてる甲冑をこたひ浪花にて修理なせしかは詩歌をおくれる其うた

〈一五七〉（文政十二年十月）九条尚実公の詩草を岸本明善か得たるよろこひに

稲津令儀

〈一一六〉（文政十年四月）稲津修己父令儀七十賀勧進短冊、予出題

稲津修己

〈三〇〉（文化十三年冬）よし子かのふと名をかへて稲津修かもとにとつきける時……

〈一〇九〉（文政九年）一地庵当座　十月廿四日　連衆　岸本明善、上島庸清、稲津修、脇坂一貫、中尾俶慎

〈一一一〉（文政九年冬）稲津修己兼題　於託明寺

〈一一六〉（文政十年四月）稲津修己父令儀七十賀勧進短冊、予出題

〈一二三〉（文政十年八月十六日）月次兼題　十六夜修己催大西山荘にて

〈一三〇〉（文政十一年春）いなつ修己か需にて雪中若菜のかた馬寅かかけるに

〈一三三〉（文政十一年）兼題　四月十三日修己催　栄根浄福寺にて

〈一四四〉（文政十一年八月十三日）八　十三　修己会　小部にて

〈一五七〉（文政十二年十二月二十六日）十二　廿六日　稲津

〈一五八〉（文政十三年　天保元年）十二月廿六日、稲津当座

〈一六二〉（文政十三年　天保元年七月十日ごろ）おなし（文月）とをかころ稲津修己身まかりし時よみておくりし

〈一六三〉（文政十三年　天保元年八月）はつき栄根寺へもうてし

に、春修己とともに花みし時さくらに蔦のまとひたるを……

〈一六五〉（天保二年七月十日ごろ）ふつき十日比いなつ修己か一周忌によみて手向ける

〈一七一〉林医生修己弟か寒月の詩結句、月歟霜乎不可知てふ韻をとりて其心を

脇坂一貫

〈一〇九〉（文政九年）一地庵当座　十月廿四日　連衆　岸本明善、上島庸清、稲津修、脇坂一貫、中尾俶慎

〈一一〇〉（文政九年）脇坂一貫家会兼題　十一、二

〈一二六〉（文政十年）九月廿六日箕面にて成美一貫会　月次当座

〈一三一〉（文政十一年春）おなし時（成美の送別）一貫か家にてうまのはなむけしける夜

山川正彬

〈一一六〉（文政十年三月）正彬月次三

〈一一六〉（文政十年四月）正彬月次四

〈一一八〉（文政十年）正彬兼題

〈一一九〉（文政十年六月）六　正彬兼題

〈一二〇〉（文政十年閏六月）閏　正彬兼題

〈一二三〉（文政十年七月）正彬兼題　七

〈一二五〉（文政十年九月十三日）正彬月次　九、十三

〈一二八〉（文政十年十二月十日）十二、十日分　正彬納会

〈一二九〉（文政十一年一月）十二日　正彬会初

〈一四六〉（文政十一年）十月々次　正彬

井関三美

〈三〇〉（文化十三年）九月廿八日於本養寺　村成、宗什、三美、院主等会

〈三〇〉（文化十三年九月二十八日）同当座、山路菊、日行、古寺落葉、三美、驛中関、村成、嶋鶴、宗什、同

〈三四〉（文化十四年）三美家にて当座

〈一一一〉（文政九年）井関三美兼題　二首　十一、十二

〈一三〇〉（文政十一年二月八日）二月々次八日　三美宅

上島庸清

〈一〇九〉（文政九年）一地庵当座　十月廿四日　連衆　岸本明善、上島庸清、稲津修、脇坂一貫、中尾俶慎

〈一一四〉（文政十年）二月七日上島庸清山荘にて会　短冊清書二首

〈一二二〉（文政十年七月）十九日　庸清会竪詠草　月次

中尾成美

〈一〇九〉（文政九年秋）中尾俶慎の月琴を弾てきかせける時によ
みておくりける

〈一〇九〉（文政九年）一地庵当座　十月廿四日　連衆　岸本明善、
上島庸清、稲津修、脇坂一貫、中尾俶慎

〈一一〇〉（文政九年十一月七日）中尾俶慎　後改成美　兼題十一、
七

〈一一一〉（文政九年十二月八日）中尾成美兼題　十二、八

〈一一四〉（文政十年三月）七十賀　越前鯖江間部侯藩中のよし中
尾成美紹介、短冊に書てつかはす

〈一一七〉（文政十年）四月兼題　五、九　中尾成美催

〈一一八〉（文政十年）成美か人の山荘をかりてあからさまにすま
へるか庭に滝落したり茶たうひけるついてに

〈一一八〉（文政十年）成美会探題

〈一二六〉（文政十年）九月廿六日箕面にて成美一貫会　月次当座

〈一二八〉（文政十年十二月）中尾成美需

〈一三一〉（文政十一年春）中尾成美故ありて都に登りあからさま
なからかしこに住へきよし其送別に

桑門日行

〈三〇〉（文化十三年九月二十八日）同当座、山路菊　日行、古寺落
葉　三美、羇中閑　村成、嶋鶴　宗什、同

〈一四二〉（文政十一年）日仰上人十七回忌　日行上人勧進　短冊

〈一六六〉（天保二年）日行上人勧進共開結三十首祖師遠忌

縁阿

〈一一九〉（文政十年）六月兼題　縁阿催　竪詠草二首

〈一二〇〉（文政十年）縁阿当座

〈一二七〉（文政十年）十、廿七　月次縁阿催　竪詠草

〈一四七〉（文政十一年）十一月々次、縁阿会　廿五日

与志子

〈三〇〉（文化十三年冬）よし子かのふと名をかへて稲津修かもと
にとつきける時……

南野将房

池田叢書の『山川正宣集』には「持房」とあるが、自筆本では「将
房」とも読める。

〈一二〇〉（文政十年閏六月）閏　兼題　持房（将房か）竪詠草

〈一二〇〉（文政十年閏六月）持房（将房か）会当座　閏　十一日

名所題中

『山川正宣集』には「夢庵老公三百周忌懐旧和歌」について次のような記事がある。

〈一〇七〉（文政九年）四月四日、牡丹花肖柏翁三百年の忌におもひ出る人さへなき吾郷の弊風そかし、ひとり懐旧のこころをよめる

冠字五首

ふるてらに昔をしのふけふしもそはつねもらせよ山ほとときす

かしこきや幾世の空もことのはの光そひ行くものうへの月

みももちのけふにしあひてかのめてし花も盛の色やみすらん

くちぬ名は世々に残れとゐなの川なかれてはやき月日をそおもふ

佐伯山々陰に咲卯花もいにしへ偲よすかならまし

翌年納大広寺

和名　牡丹　布加美久佐

後柏原帝御前発句

空におきてみん世やいくよ秋の月

万葉

佐伯山卯花もたし云々

（頭注）

また翌年九月に次のような記事がある。

〈一二五〉（文政十年）山路菊　九月四日　牡丹花巻納　当座

○巻中歌及び序奥あり

幾世々に高ねの月もてりそひてやまちにこほふ露のしらきく

以上、江戸時代後期、文政九年（一八二六）に成立した「夢庵老公三百周忌懐旧和歌」を紹介しつつ、池田の酒造業兼金融業者である西大和屋の山川正宣を取り巻く地域の文化人たちを眺めてみた。時代により、たとえば戦国時代の池田氏や肖柏、江戸時代の正宣をめぐる人々のように、地域文化の担い手は変化する。歴史の流れの中にあっては当然の変化であるが、その担い手がいかなる性格をもつか、どのような階層に属するかなど歴史的研究を進めることによって、新しい文学史研究の道が開かれるであろう。

【注】

① 山川正宣については、本間良三郎「山川正宣小伝」（國學院雑誌一九―六　大正二年六月）・水田紀久「山川正宣」上・下（上方文化四・五　大阪文化研究所　昭和三十七年一月・六月）などの研究があり、特に水田氏の研究より多くの参考を得た。

② 池田酒造については、池田史談会編『池田酒史』（池田史談会

大正八年）・篠田統「池田酒造史」（『池田市史』各説編　昭和三十五年）・小松和生「近世在郷町の酒造業―北摂池田郷の場合―」（大阪大学経済学　一七―四　昭和四十三年三月）・柚木学「幕藩体制確立期の都市酒造業―北摂池田郷の場合―」（経済学論究二四―三　関西学院大学経済学部　昭和四十五年）・林田良平「池田酒の変遷」（大阪春秋一七　昭和五十三年）などの研究がある。また昭和六十二年十月池田市立歴史民俗資料館開催の特別展「江戸下り銘醸池田酒と菊炭」の図録も大いに参考となった。

本稿執筆にあたり、翻刻のご許可をいただいた大広寺住職金子康夫師、種々のご教示を賜った柚木学先生・浜千代清先生、また再々にわたりお世話になった池田市教育委員会の田上雅則氏に感謝申し上げる。